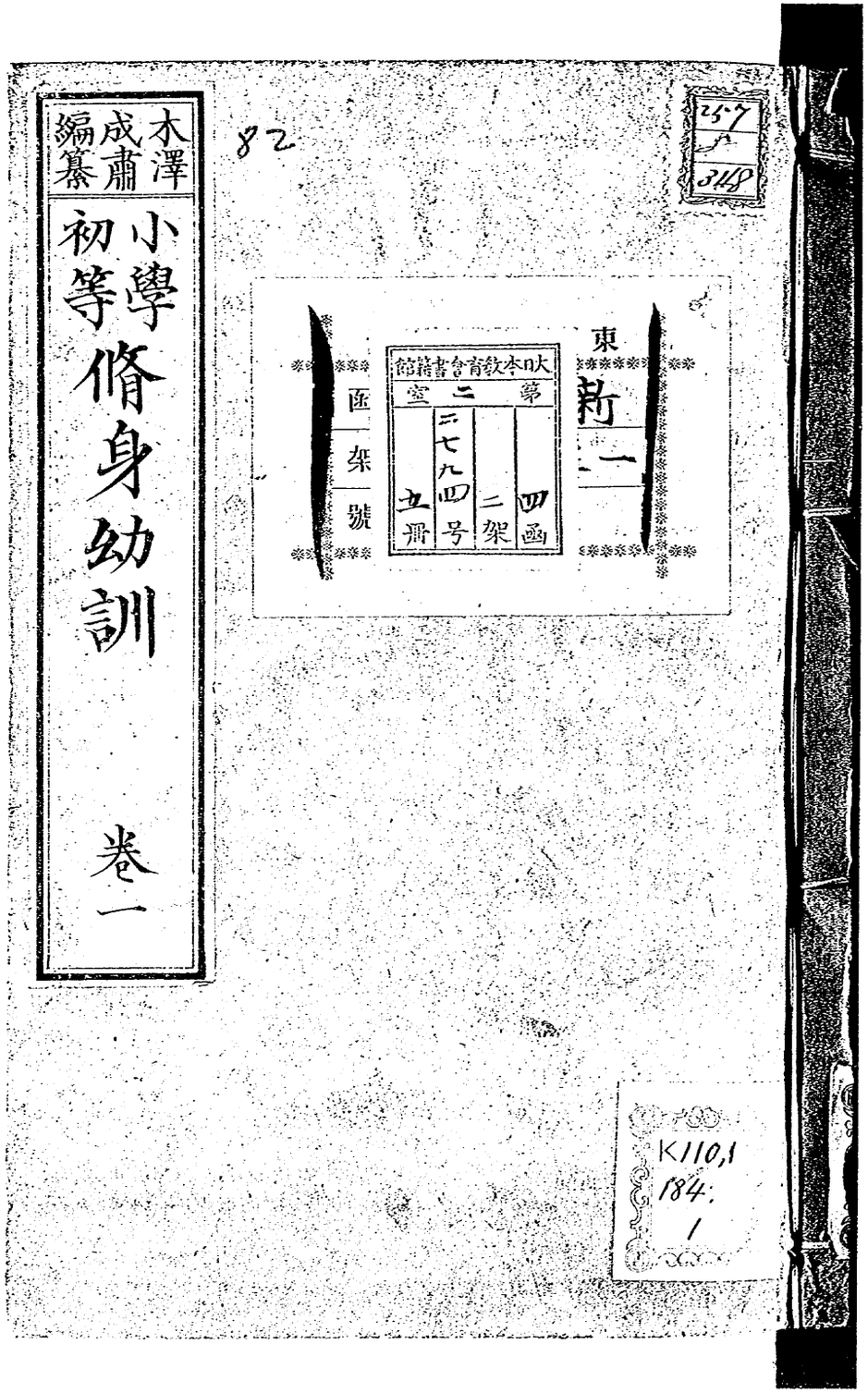

木澤成肅編纂

# 小學初等脩身幼訓

卷一

82

257
A
348

東京教育會書籍館
第二室
四函 二架 二七九四号 立冊

新一

匿架一號

K110,1
184:
1

K110.1
184

木澤成肅編纂
蒲生重章校閲

# 小學初等 脩身多訓

卷一

明治十五年三月廿八日版權免許

東京圖書館藏



幼童猶空
器清水亦
受濁水亦

爰為父師
者其可不
以善言滿
之乎

中村敬宇

中和堂
義方

東京圖書館藏

# 小學初等修身幼訓卷の一

木澤成肅編纂
蒲生重章校閲

## 第一

○温順なる者に、善き人は、ある

圓融天皇ノ敕諭

○己を責て、人をせむることなかれ　徳川家康ノ壁書

○事は、勉強にあるのみ　董仲舒ノ格言

○志あるものは、事竟に成る　光武ノ格言

○人として、信なければ、立たず　論語

○神明は、ひとの心にあり　尊猷親王ノ遺訓



○善にうつり、過をあらためむ　白鹿洞ノ掲示

○和げば、仇なく、忍べば、辱なし　省心録

○忿をこらし、慾を窒ぐ　周易

○身を愛しては、人の愁をしらず　楠正成ノ壁書

○父に事へて、能く其力を竭し　論語

○君に事へて、よく其身を致す　同上

○其道を明かにして、其功を計らず　董仲舒ノ格言

○遊びも度かさなれば、樂しからず　楠正成ノ壁書

○苦は、樂の種、樂は、苦の種と知るべし　徳川光圀ノ遺訓

○謂ふこと勿れ、今日學ばずして、來日ありと　勸學ノ文

○人として、一言も惡しき事を、語るべからず　藤原小黒麻呂ノ遺訓

○豹死して、皮を留め、人死して、

名を留む 梁王彦章ノ格言

○立に必ず方を正ふし、傾き聞かず 禮記

○食するに語らず、寢るにものいはず 論語

○珍膳も毎日むかへば、うまからず 楠正成ノ壁書

○人驕れば、志昏し、志昏ければ、計短し 傳家寶

○財に臨んで、いやしくも、得ること勿れ 禮記

○己の欲せざる所、人に施すこ

と勿れ　論語

○善を見ては、之に從ひ、義を聞ては、則チ服す　弟子職ノ

○無道を行ふべからず、非禮を爲すべからず　聖德太子ノ遺訓

○人を視るに、行と言との、合不合にて知るべし　嵯峨天皇ノ敕諭

○及ばざるは、過ぎたるに、勝れり　德川家康ノ遺訓

○奢りは、長ずべからず、欲は縱にすべからず　曲禮

○節を制し、度を謹めば、滿て溢

れず　孝經

○高直の器物を、求むべからず　楠正成ノ壁書

○常に足れるとする人は、限りなき、大福なり　紀長谷雄ノ遺訓

○禍福は、門なし、唯人の招く所あり　左傳



○患は、忽にする所に生じ、禍は細微より發る　後漢書

○平心和氣は、是れ身を養ひ、德を養ふの工夫なり　貝原益軒ノ格言

## 第二

○身をつゝしみ、用を節して、以

て父母を養ふ　孝經

○人遠き慮りなきときは、必ず近き憂あり　論語

○身を謹めば、過なく、用を節すれば、とぼしからず　司馬光ノ格言

○分別は、堪忍にあると、知るべ



徳川光圀ノ遺訓

○學問の道は、他なし、其放心を求むるのみ　孟子

○過つて改めざる、是をあやまちと謂ふ　論語

○その義を正くして、其利を謀

らず 董仲舒ノ格言

○小なる事は分別せよ、大なる事は、驚くべからず 徳川光圀ノ遺訓

○心を正くして、枉れるに従はず 後白河天皇ノ敕諭

○心正しき時は、求めざれども、事皆叶ふ 平高棟王ノ遺訓

○外に正道をかざる者は、内に邪心をふくむ 楠正成ノ壁書

○堪忍は、無事長久の基ひなり、怒りは、敵と思へ 徳川家康ノ遺訓

○巧言は、徳を亂る、小しく忍ざ

れば、則チ大謀を亂る

○小事にも約をたがへず、誠を守るものは、君子なり　内大臣實宗ノ女仙子ノ嘉言

○君子は、言を以て、人を擧げず、人を以て、言を廢せず　論語

○前車の覆へるは、後車の戒なり　漢書

○欲心、内に動く時は、もろ〳〵の惡生ず　藤原資親ノ遺訓

○人みな、幸を得んとならば、人事をつとめよ　平忠盛ノ遺訓

○躬自厚ク、して、薄く人を責れば、

怨に遠ざかる　論語

○貴賤は、今日のれこなひに、よるべし　藤原長政ノ女藤子ノ嘉言

○其進むこと鋭き者は、其退くこと速かなり　孟子

○玉琢かざれば、器を成さず、人學はざれば、道を知らず　禮記

○國の厚恩を荷ふ、當に忠義を以て、國に報ゆべし　岳飛ノ格言

○心に望れとれば、困窮したる時を、思ひいだすべし　德川家康ノ遺訓

○凡そ人、善を好まざるはなし、

是を好まば、學問して、道理を知るべし　大和俗訓

○獨り學んで、友なければ、孤陋にして、聞くこと寡し　學記

○之を知るを、知ると爲し、知らざるを、しらずとせよ　論語



○少年老易く、業成り難し、一寸の光陰、輕ずべからず　白居易ノ詩

○人當に、有用の學を爲すべし、無用の學を、爲すべからず　大和俗訓

○士道に志ざし、惡衣惡食を恥るものは、未ともに議るに足ら

ざるなり 論語

○飲食の人は、人之を賤んず、其小を養ふて、大を失ふが爲なり 孟子

○學を好むは、智に近し、力め行ふは、仁にちかし、恥を知るは、勇に近し 中庸



○道學なければ、藝多しといへども、根本立たず、君子と謂ふべからず 大和俗訓

○人を譏れば、人又吾を譏る、人を譏るは、卽ち自ラ誹るなり 傳家寶

○名を成すは、毎に窮苦の日に

在り、事を敗るは、多く得意の時に因る 傳家寶

第三

○仁義うちにある人は、よくさかゑ、利欲内にあるものは、必ず亡ぶ 知仁親王ノ遺訓



○理に順ふ時は、則チ裕かなり、欲に從ふときは、惟レあやふし 朱子ノ格言

○丈夫志を爲す窮しては、當に益〻堅かるべし、老ては、當に益〻壯なるべし 馬援ノ格言

○人の過は、吾が心に之を知る

も、妄に口に出すべからず　大和俗訓

○人の短を匿さず、人の急をすくはざるは、仁義の人に非ざるなり　畜德錄

○他事をなして、學を好むの心に、勝たしめざれば、必ず進むこ



とあり　薛文清ノ格言

○學ぶ者は、必ず師を求む、師を求ること、慎まざるべからず　程伊川ノ格言

○父母長上、教誡することあらば、首を垂れて、之を聽くべし　朱子ノ格言

○父母在せば、敢て其身を有せ

ず、敢て其ノ財を私しせず　禮記

○出れば、必ず告げ、反れば必ず面す、遊ぶ所、必ず常あり　禮記

○臣の君に事る、猶ホ子の父に事るがごとし、忠信を以て、本となす　胡安國ノ格言



○惡の小なるを以て、之を爲すこと勿れ、善の小なるを以て、爲さゞること勿れ　昭烈ノ格言

○道近しと雖ども、行かざれば、至らず、事小なりと雖ども、爲さざれば成らず　韓詩外傳

○父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり 孟子

○善を爲すことは易く、善を行ひ、其名を求めざるは難し、是誠の善なり 大和俗訓

○君子は、人の善を揚げて、人の惡を隱くし、人の長ずる所を取り、短き所を言はず 同上

○忠信以て、甲冑となし、禮儀以て干楯となし、仁を載せて行き、義を抱て處る 家語

○善は、小にして、益なしと謂ふ

べからず、不善は、小にして、傷れなしと謂ふべからず　賈誼新書

○凡そ人と語るに、彼をして、其所長を説かしむべし、我に於て益あり　佐藤一齋ノ格言

○人と約せば、信を失ふこと勿れ、一度信を失へば、人に非ずと思ふべし　大和俗訓

○世間第一敬すべきの人は、忠臣孝子なり、世間第一憐むべきの人は、寡婦孤兒なり　魏環溪ノ格言

○不肖を以て人を待つ、愚者と

雖ども甘んぜず、非禮を以て人を處す、賤と雖ども、亦怨む　習是編

○博く之を學び、審に之を問ひ、慎て之を思ひ、明に之を辨へ、篤く之を行ふ　中庸

○父母之を愛すれば、喜んで忘れず、父母之を惡めば、懼れて怨ることなし　曾子ノ格言

○官は官の成るに怠り、病は少く愈るに加はる禍は懈惰に生じ、孝は妻子に衰ふ　說苑

○朝早く起くるは、家の榮ゆる

兆なり、晩く起くるは、家の衰ふる基なり　大和俗訓

小學初等修身幼訓卷の一　終

明治十五年三月廿八日版權免許
同　十五年五月　出版

定價八錢

東京府士族　編纂人　木澤成肅　下谷區下谷西町壹番地
同　士族　出版人　辻謙之介　本郷區本郷元町壹丁目六番地
同　平民　出版人　阪上半七　日本橋區吳服町十二番地
同　平民　發兌人　北畠茂兵衛　同區通壹丁目

木澤成肅編纂

# 小學初等脩身幼訓

卷二

東京市一

自函一架一號

大日本教育會書籍館
第二室
四函
二架
二七九四号
五冊

K110.1
47
2